大阪人とアート感覚

堀井　「アートと市民参加」という水都大阪2009のコンセプトに対して、当初、「大阪人の気性や土地柄とアートは結びつかないだろう」という意見が少なくありませんでした。露骨に「アートなんか、あかんで」と言われたこともあります。それでずいぶん悩んだのですが、実際にイベントが始まると、多くの市民の皆さんに参加していただき、とても喜んでもらえました。まちにアートが滲み出していく楽しさを実感しましたね。ヤノベさんの作品も大変注目を集めました。ヤノベさんは、水都大阪2009にどのような思いを持たれましたか。

ヤノベ　芸術というと、美術館やギャラリーで鑑賞する何やら難しいものという印象がありますね。しかし、水都大阪2009はそんな先入観を変えました。多くの人とコミュニケーションをとりながらアートを楽しむことで、アートの魅力を伝え、理解していただく良い機会になったと思っています。

堀井　今日は特別にラッキー・ドラゴン号を呼んでいただきました。龍といえば水の守り神。私もこれを見たときは龍神さまが現れたという思いがして、びっくりすると同時にとてもうれしく思いました。

ヤノベ　来場者に夢や驚きを感じてもらえる作品が必要だと思ったんですね。そこで、あたかも町のなかに怪獣が出現してきたかのような、火や水を吹く伝説の龍をイメージして作ったんです。

堀井　ラッキー・ドラゴン号には、どんなメッセージが託されていますか。

ヤノベ　作品名は、かつてアメリカの水爆実験（1954年）で被爆した遠洋マグロ漁船『第五福龍丸』に由来します。私はこれに、核兵器廃絶だけでなく、戦争や環境破壊などに対する警鐘の思いを込めています。一見面白い作品ですが、遊園地にあるエンターテイメント的な装置ではありません。一方、子どもたちに向けては、テレビや映画で見る世界を本当に作っている人たちがいることを知らせたい。これを見て、「自分が大人になったら、こんな夢のあるものを作っていいんだ。作りたい」と思ってほしいですね。大阪市役所に展示した巨大ロボット『ジャイアント・トらやん』も同様に、子どもたちの未来に向けて、イマジネーションの可能性を広げる種まきだと思っています。

堀井　なるほど。でも、イベントが終われば、どこへ行ってしまうのでしょうか。

ヤノベ　イベント終了後は廃棄する契約なのですが、多くの人の協力を得て作り、多くの市民の心をつかんだ作品ですから、ご要望次第では、伝説の龍が再びどこかに現れる可能性はあると思いますよ。

堀井　それは大いに期待しています。

見られないものを見る技術

堀井　水都大阪2009をスタートとして、今後も大阪のまち磨きを続けていかなくてはならないと思っています。そのためには、アート作品を美術館のガラスケースに収めるだけではなく、まちのなかで市民と触れ合うことも必要でしょう。それによってまち全体が美術館やミュージアムとなり、劇的な感動が生まれるのだと思います。現在開発中の梅田北ヤードでも、感性をみがき楽しむ空間づくりが求められると思います。宮原さんは、ご専門の通信技術やコンピュータ技術とアートを融合させて新しい拠点をつくろうと、北ヤード開発で主導的役割を果たしておられますが、少し詳しくお話いただけますか。

宮原　北ヤードの開発にあたっては、技術者と芸術家がコラボレートする場所としての活用を考えています。それによって、一般の人にサイエンスへの理解をより深めてもらうことができるんですね。その代表例が、見える化（可視化技術）です。例えば台風が発生するメカニズムや、地球が温暖化していくようすなどを、いくら数値やグラフで説明しても一般市民には理解されにくい。しかし、ビジュアルで表現すれば、実感として分かりやすくなります。だからアート感覚が不可欠なんですね。私たちは、そうして作った映像を北ヤードでも見てもらいたいと思っています。

堀井　サイエンスに対する理解のほかには、どのような新しい可能性が生み出されるのでしょうか。